



孤児から王子になった蓮也は、王国随一と言われるウィザードナイト（魔法剣士）・ゼイソンの指導を受けていた。

ゼイソン

「今日は瞑想の授業です」

蓮也

「瞑想って目閉じてるだけのつまらなさそうなやつだろ？」

ゼイソン

「瞑想は魔法レベルを向上させるのにとっても重要です」

蓮也

「ならやる」

ゼイソン

「よろしいですじゃ」

最近、蓮也はゼイソンの見せる魔法に興味を持ち出した。そのため、蓮也の興味を先行させるように授業を進めている。

ゼイソン

「では、説明します」

「瞑想とは“瞑目”して“想う”と書きます」

「無心になる瞑想もありますが、基本的に観想と言って意念・イメージを用います」

蓮也

「よくわからんぞ」

ゼイソン

「例えば、若のメイン魔法は火炎でしたな。その火炎魔法を出すには、火炎のイメージをします。しかし、そのイメージよりも更に根本的なイメージをここでは用います」

蓮也

「火炎のイメージまではわかったが、その先がわからん」

ゼイソン

「今説明しまする」

「この宇宙の全ては自性・プラクリティという根本エネルギーで満ちています。そのエネルギーが物質化する原初物質がウロボロスというものであります」

蓮也

「ふむ」

ゼイソン

「このウロボロスは光を透過し、目には一切見えませぬし、普通の物質は干渉しません。そこで、シンボルとイメージを用いて、この原初物質にアプローチするのです」

蓮也

「変な用語が多すぎて、ますますわからんぞ」

ゼイソン

「つまり、尾っぽを加えた竜のイメージをします」

ゼイソンは尻尾を加え円形となった竜の図を光魔法で描いた。

蓮也



「イメージしたぞ」

ゼイソン

「更に、その竜が激しく振動しているイメージをします」

蓮也

「よし、したぞ」

「バフッ！」

急に蓮也の手から大きな音を立てて炎が立ち上がり、蓮也がびっくりすると炎は一瞬で消えた。少しだけ髪の毛が焼け焦げて、その匂いが部屋に立ち込める。

蓮也

「なんだこれ・・・」

ゼイソン

「これが原初竜ウロボロスの力なのですじゃ」

蓮也

「すごいな・・・」

ゼイソン

「この空間にはウロボロスが充満しています。というか、空間も物質であり、ウロボロスは空間も作り出しております。そして、全てはこのウロボロスの状態で地水火風空のエネルギー属性が決まるのです」

蓮也

「これはやってみないとわからないな」

ゼイソン

「しかし、今のように行くと危険です。ですから、両手を合掌した状態から少し手と手の空間を開けて、その空間内でイメージをします。そうすると、両方の力でエネルギーが拮抗して安全にエネルギーを練ることが可能となります」

と言って、ゼイソンが胸の前で何かを抱えるようなポーズをすると、その手と手の間に不思議なエネルギーを感じる。

ゼイソン

「これも魔法充填の一つの方法ですが、戦場で瞑目するのは危険ですので、実践では閉眼せずに魔法を用いるようにします」

蓮也も早速試し出す。

蓮也

(尻尾を加えた竜が振動してと・・・)

バフッ！

今度は安全に行っているようだ。

ゼイソン

「逆に、この振動を止めるようにイメージすると氷結魔法になります」



ゼイソンの両手から青白い光が漏れ出し、冷気が漂い出す。

ゼイソン

「そして原初竜ウロボロスが密になるとイメージすると土魔法になります」

今度は周辺の空気が重く感じられる。

ゼイソン

「その逆に、ウロボロスが疎になるとイメージすると風魔法になります」

空気がゆっくりと渦を巻いて動き出す。

【原初竜ウロボロスのイメージ】

振動：火⇄静止：水（氷結）

過疎：風⇄過密：土

孤児院時代、お遊戯に一切参加しなかった蓮也であったが、このような方法を聞くと蓮也は夜通し練習することもあった。しかし、まだ魔法のリリースには条件が達していなかった。

【解説】

ウロボロスとは、尾を噛み飲み込む蛇であり、様々な文明に見られる。

本作品の世界観では、この神代の世界のウロボロスが、各文明に広がったというものである。

このウロボロスは超弦理論のように振動する紐として、描いてみた。その振動パターンと過疎・過密パターンの組み合わせによって物質の状態が決まるという設定である。もちろん、ファンタジーの世界の話であることは言うまでもない。